

「交流拠点」裏付け

弥生時代
人骨分析

遠隔地から多様な人々



国史跡青谷上寺地遺跡（鳥取市青谷町）で出土した弥生時代後期（1〜2世紀）の大量の人骨のDNA分析で、人骨の大半は渡来系で母系の血縁関係はほぼないことが分かった。2日、鳥取県埋蔵文化財センター青谷調査室は「遠隔地から多様な人々が集まってきていたことを示す。評価はこれからだが、青谷が交流拠点だったことを改めて強く裏付ける」との見方を示した。（渡辺暁子）

これらの人骨は、弥室は「婚姻や親子関係生時代後期に争いに巻き込まれた村人のもの」と見直すべききっかけにもなるという。同調査

人骨のDNA分析により、多様な人々の交流拠点だったことが改めて裏付けられた青谷上寺地遺跡周辺（鳥取県教委提供）

人骨が見つかった溝からは、一緒にたくさの土器やガラスの装飾品などが見つかった。同センターの浜田竜彦同遺跡調査整備担当係長は「これらの考古学資料をもっと一度見直し検討する必要がある」と指摘する。今後、ゲノム解析が進めば、人類学と考古学双方の知見から同遺跡の解明が進むことが期待される。浜田係長は「青谷が特殊な地であったことは間違いない。研究によって、日本の歴史にとっても非常に重要な成果が得られる可能性もある。ぜひ注目してもらいたい」と話している。同センターは17日午前10時から同町総合支所で、これまでの分析内容について国立科学博物館の篠田謙一副館長を招いた報告会を開く（要申し込み）。一方、核ゲノムの解析も踏まえた報告会は来年3月に予定している。

大量人骨ほぼ渡来系

国立科学博物館などの研究グループが進めている国史跡青谷上寺地遺跡（鳥取市青谷町）で出土した弥生時代後期（1〜2世紀）の大量の人骨のDNA分析で、人骨のほとんどが朝鮮半島や中国大陸からの渡来系の特徴を持つことが2日、同館の研究や鳥取県埋蔵文化財センターへの取材で分かった。人骨間に母系の血縁関係はほとんどみられないという。（23面に関連記事）

分析は、日本列島に居住していた人類集団

青谷上寺地遺跡出土 DNA分析 母系の血縁関係みられず



の起源を調べる「ヤポネシア人の総合的研究」の一環。同遺跡からは100体超の人骨が出土しており、歯根や内耳骨40点を同センターが研究グループにて提供した。また、数々の弥生時代の人骨のDNAを詳しく分析するのは初めて。

同館の篠田謙一副館長によると、一度に多数の遺伝子の塩基配列を読み出すことができ、最新装置「次世代シーケンサー」によって、人骨31点の「ミトコンドリアDNA」の配列が得られた。同DNAは在来系とゲノムの調査を進め、渡来系に分けられる。篠田副館長は「核が、人骨はほとんどがゲノムを解析しないと渡来系だった。同DNAははっきりしたことは分らないが、当時の弥生社会がどんなものだったか、考古学の立場から説明してもらう必要がある」としている。（渡辺暁子）